歴史資料室だより ⑥

近藤喜則史料展示室

＝4＝

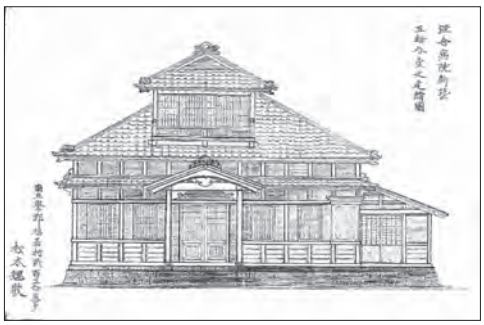
今回は、アルカディア文化館2階の「近藤喜則史料展示室」について、喜則の3つの業績のうちの「医療」を紹介します。

住民の基金で病院を

近藤喜則は、地域の医療体制の確立にも情熱を注ぎました。具体的には1873年（明治6）7月、意を同じくしていた長男・蕗太郎が発起人となり、郷社として各村の代表者らが集う諏訪神社の祭典の席上、病院建設を呼びかけました。その結果、巨摩郡の中野から万沢までの9カ村、八代郡の栄村など5カ村、計14カ村が賛同し、機運は一気に高まりました。

建設に向けては、住民から基金を集めるという画期的な取り組みとし、各村内の組ごとに世話人を置き、各戸から1日1厘（約20円）の「賦戸金（ふこきん）」を集め、それを積み立てて病院建設をめざしました。

県内でも甲府にようやく県立病院ができたばかりの時代、医療を願う住民らの思いは、その後2年足らずで結実。1875年（明治8）5月、県下初となる本格的な地方病院が南部の地に誕生したのです。



モダンな建物だった新病院の平面図＝下山・本国寺蔵

義立南部病院

病院名は「義立南部病院」。場所は現在の南部中学校グラウンド南側の高台で、本陣跡に移転した旧蒙軒学舎の建物を改修しての開院でした。院長には中島慎一を長崎から招きました。

中島はオランダ医学を学んだ蘭医で、その経験もあって病院の評判は高く、地域内はもちろん、遠くは静岡県下（駿州、豆州）からも患者が訪れたといいます。

病院は、翌年、「山梨県病院睦合分院」となりました。運営が厳しいなか、県に勤務するようになっていた喜則らが県令（知事）に働きかけた結果、県費によって運営される分院に移管されたのです。こちらも県で最初のことでした。

ただ、病院の土地・建物等は県に寄付する形が取られ、喜則も殖産社から600円（約1200万円）を甲府本院に寄付しています。

新病院の建設

1885年（明治18）、施設が手狭になったため、睦合、富河、栄の3村と有志から資金を募り、近くの場所（現・南部区明治町内）に2階建ての新しい病院を建設しました。診療所、手術所、患者控所、事務所を備えたモダンな建物でした。

睦合分院はその4年後、県の財政引き締めによって廃院となってしまいますが、近隣各村と喜則ら有志で作る病院保存会の支援のもと「公立睦合病院」として再開。5人の医師が勤務した時期もあり、睦合病院は、名医の誉れ高い近藤寛治院長のもとで評判を呼び、その名声は内外に広く知れ渡ったといわれます。

思いはその後も

睦合病院はその後、大正、昭和にかけての40年余り、地域医療の中心としての役目を果たしたのち、1931年（昭和6）、寛治院長の死去に伴い、惜しまれつつ閉院となりました。

しかし、同院長のもと睦合病院では多くの若者が医学を学び、その道に進んだあと、近隣各地や東京で個人病院を開業しました。また、睦合病院も個人病院として継承されるなど、「住民にしっかりとした医療を」と願った喜則の熱い思いは、長きにわたり引き継がれていきました。

寛治の愛馬

明治中期から昭和にかけて睦合病院の院長を勤めた近藤寛治は、喜則のおいに当たります。

喜則の弟だった父の死もあり、喜則の援助のもとで医学の道に進み、東京大学を卒業。親友からの「明治天皇の侍医を」という要請を固辞し、喜則の思いに添って地域医療に生涯をささげました。

交通手段が乏しい当時、寛治は馬で往診し、周辺各村でも診療に当たりました。そのため、馬は多い時で8頭も飼っていたといわれます。

その中に愛用した南部馬の「黒雲」という馬がいました。喜則の孫で、小学生時代に一時、寛治の家に住んでいた、画家の近藤浩一路もこの黒雲が特に気に入っていて、後年、はとこにあたる寛治の六男が京都の自宅を訪れた際、頼みに応じてその姿を色紙に描いています＝写真（個人蔵）＝。